

202. イスラエル考古事情(3)

— 博物館 —

1. はじめに

(仮称)琵琶湖博物館の「琵琶湖の歴史と民俗」展示では、湖底遺跡、湖上交通、湖の祭り、漁労、治水・利水の歴史を大きな柱としており、広く世界に目を向けた展示やその他諸活動を目指している。また、「琵琶湖の環境」展示では、世界の湖を紹介して琵琶湖を見つめ直すことも企画している。

こうしたことから、この博物館の展示を計画していく上で、ガリラヤ湖と琵琶湖という、その位置、地域の中で果たした役割や人間とのかかわりの歴史が酷似しているアジアの東端と西端の2つの湖を中心に、資料や情報を入手し、「博物館の国」とも言われるイスラエルの展示手法を学び、ひいては将来的には琵琶湖とガリラヤ湖が姉妹湖となるべき何らかの素材が提供できることを意図して、イスラエルの諸遺跡や地勢上・文化上の要衝、それに博物館・資料館を訪れた。

本シリーズ最終回は、博物館事情をかいま見る。

2. 博物館の様子

(1) イスラエル博物館

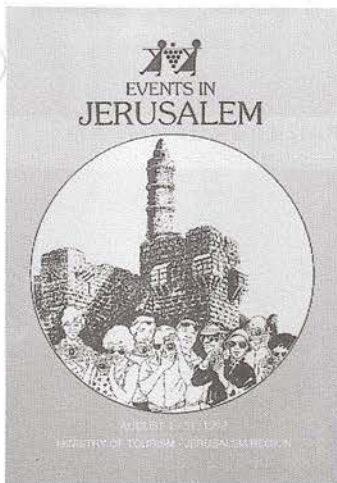


図-1 イスラエル観光省のパンフレット(1992年8月号)
(エルサレムの20の博物館の展示内容が紹介されている)

「博物館の国」とも言われるイスラエル最大の博物館がエルサレムにあるイスラエル博物館である。建国以前からあったベツアレル民族美術

館を引き継ぎ、1965年に国立博物館としてオープンした。大きく5つの建物からなり、それぞれ異なった意匠と構造となって特色を出すようにしている。また各館(ウィング)の見せ方も様々であった。

ゲートを入ってすぐミュージアムショップがあり、各館にもショップが備わっている。

死海写本館は先に述べたクムランの写本だけを展示する館で、重要資料の光による劣化を防ぐため館内はかなり暗いが、ケースごとにボタンを押せば1分間だけ照明がつく工夫がなされていた。しかし最も重要な資料はさすがにレプリカであった。国宝級で、見ただけでよくわからないものを如何にたいそうに見せるかという意味では参考になる。

聖書・考古学館は中世十字軍までの歴史について展示しており、大きな順路はありながらも展示ケースはフリー動線的配置であった。ただケースごとに番号が付けられており、時代を細かに追えることは便利であった。今でも随時資料の入れ替えを行っているようで、新たな発見資料も幾つか見られた。

ルート・ユース・ウィング(子供館)はいくつかのコーナーからなり、鏡、リサイクルリングルーム、工作コーナー、本のコーナー、ミニチュアルーム、模型の滑り台とかたつむりのトンネル、玩具の畑植えなどがあり主として幼児を対象としたものであった。リサイクルリングルームは120㎡程の広さの部屋で、家庭から持ち寄った箱や牛乳パックなどで工作をしていた。総じて幼稚園に見えた。

その他特別展示として1930年代のイスラエルおよびベト・シャンの展示があったが、縦5m、横1mの垂れ幕を約1m間隔で並べて1枚のベト・シャンの全景写真に見せるやり方は、安上がりながら迫力があった。日本では見ない手法である。



図-2 イスラエル博物館の「お急ぎの人」向きの案内パンフレット

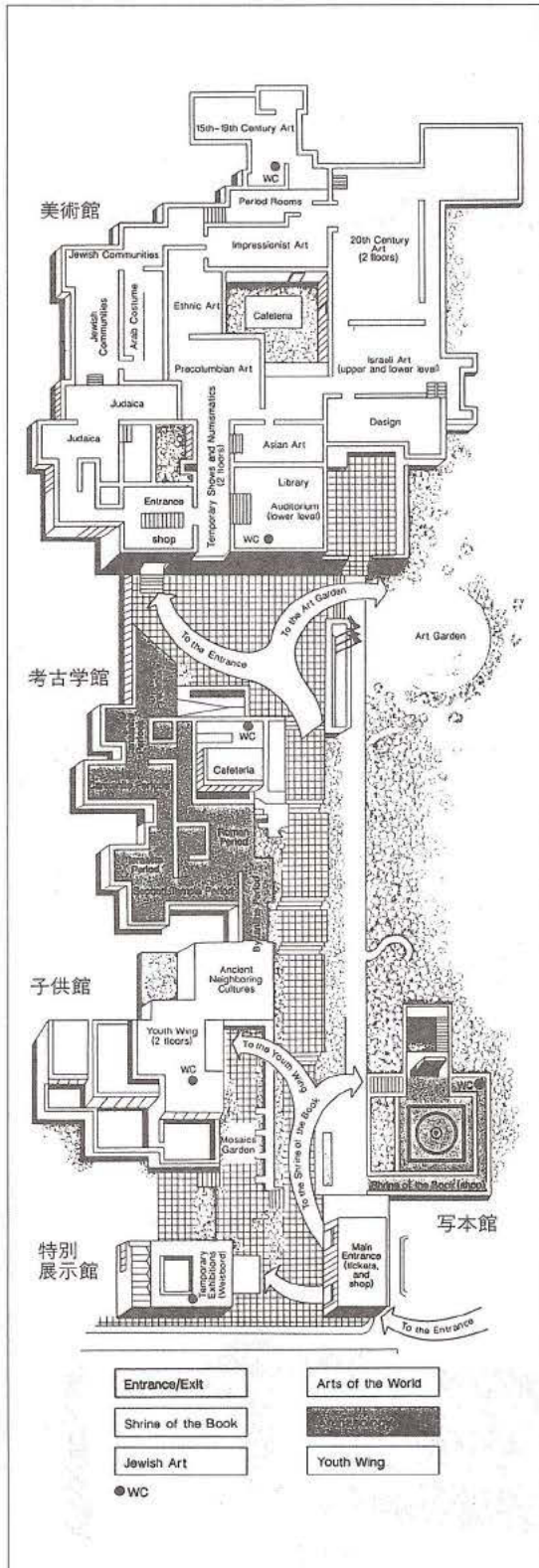


図-3 イスラエル博物館見取図

説明は英語とヘブライ語。車椅子用の斜路はなく、全ての階段にリフトと係員がいる。多くの戦禍による身障者への対策が行き届いているのかと勝手に考えた。

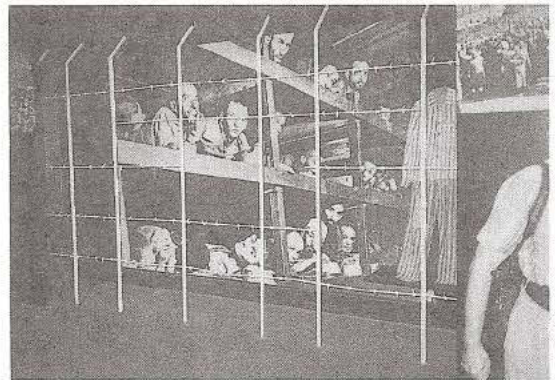
とにかく館ごとにあるいはコーナーごとに、床の色、天井の高さ、壁の処理、展示法など様々であり、色々な方法を試しているかのような感じがしたが、広い展示延べ面積でありながら飽きはこなかった。

イスラエル博物館のほかエルサレムの博物館の催しやイベントは、週末のエルサレム・ポスト紙に掲載され、また観光省の月刊パンフレット等にも紹介されるなど、博物館の情宣活動が行き届いている。

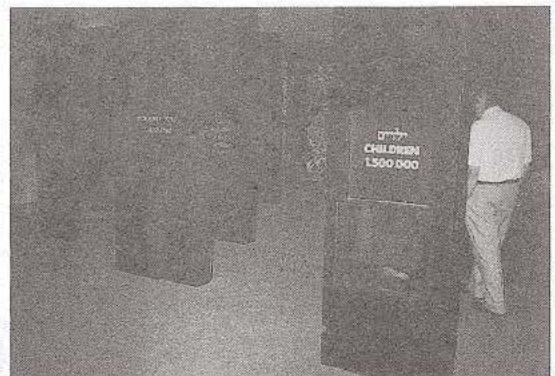
(2) ヤド・バシェム (Yad Vashem Holocaust Memorial and Museum)

第二次世界大戦中、ナチス・ドイツにより虐殺された600万人ユダヤ人を記憶するメモリアル博物館である。

ホロ・コーストに関する公文書、フィルム、記念品、遺品を中心に展示するが、大量に並べるのではなく、実物は少なくしてそれを中心に演出する方法が主体である。一つの部屋に、殺された人の数が記された柱が幾つか並ぶだけであったり、夜空をイメージした天井



一枚の写真を実物に見せる強制収容所の展示



150万人の子供が殺されたという展示



杉原千畝の碑(イスラエル人はチウネと発音できない)

以外は真っ暗で、死んだ子供の名前を次々に読み上げていくだけの館もある。有名な「記憶のホール」では、ガス室の悲劇を永遠に象徴する青白い火と強制収容所の名前を見るだけであったが、訴えるものがあった。

広い庭園にヨーロッパのユダヤ人をナチからかくまった「異邦の義人」の名を記念した植樹があり、何と Senpo Sugihara-JAPAN の碑と彼が植えたという木を見ることができた。

(3) ロックフェラー博物館

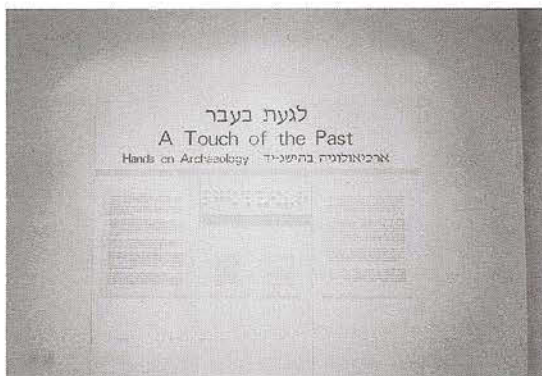
イギリス委任統治政府により1938年に建設されたものであり、元はヨルダンの管理によるものであった。イスラエルにおける最も重要な博物館と言われていたが、地下室がないため、戦禍を避けるべく重要な資料はイスラエル博物館に移管されてしまっている。

イスラエルで見た博物館の中で唯一古典的な博物館で、東京国立博物館あるいは韓国の博物館のように、展示手法より資料の価値で見せるというものであった。逆に言えば、女人受けする博物館であった。

大学での外書講読の教科書の挿し絵でみたイエリコ出土の、目に貝をはめ込んだ人骨を見ることができた。



ロックフェラー博物館



「過去に触れる」館入り口



視覚障害者のための展示品

(4) ハアレツ・イスラエル博物館

テルアビブにある国立博物館で、ユダヤ教の安息日にテルアビブで唯一オープンしていた博物館である。

イスラエル博物館と同様にテーマ別に、石器時代館、銅館、ガラス館、生活館、ユダヤ館等の展示館が立ち、屋外にもオリブしぼりや民俗資料としての農具などが展示されている。

石器時代をテーマとした建物では、入り口で説明書を借りて出るときに帰すというシステムを取っている。人に追われた鹿などは絵、矢や槍は実物を壁面に展示したものがあり、日本でもこうした方法ははやっている。細かな遺物は個々に説明を加えず、手元で一括して説明するキャプションはすっきりして見やすかった。

特筆すべきは、手で触る考古学館とでも言うべき A Touch of Past, Hands on Archeology と銘うったもので、視覚障害者が手で触れる比較的大形の考古資料がスペース的に余裕をもって展示されている。もちろん点字説明つきで。

一角に手工業工房群とでも言うべきところがあり、ちょうどガラス工房で実演を行っていた。そのほかにパン屋、馬具工房、機織り、鋳金、土器作り、糸紡ぎ、綿紡ぎ、靴屋、アクセサリ屋、大工、木工師、鋳物屋がある。



ガラス工房での実演



手すりを利用した足の不自由な人向けのリフト

また敷地内にテル・カシルの遺跡があり、発掘されたペリシテ時代の神殿遺構が時代ごとに説明パネルで色分けされて示され、一部の建物が復元されている。イスラエルのテルで多くの石壁、日乾煉瓦壁の建物と言われるものを見学したが、初めて天井まで復元されたものを見て建物のイメージが沸いた。

まだ隣接地では発掘調査中である。

(5) イグアル・アロン博物館

ガリラヤ湖西岸キブツ・ゲネサレ出身の政治家イグアル・アロンを記念する博物館で、「ガリラヤ地方の人間」をテーマに、聖書のころから現代までのガリラヤ湖周辺の生活を主としてグラフィックとジオラマで紹介している。

この特別保護水槽には、1986年1月の雨不足で湖の水位が3～4m下がったおりに湖中から発見された紀元前後の木造船が保管されているが、船は現在保存処理中であり、見られるのは2年後であるとのことであった。

この船に関する資料は図録・冊子のほかスライドフィルム、ビデオテープとして販売されており、見学者への便宜を図っている。ガリラヤ湖周辺のみならずイスラエルの各地で一人の日本人にも出会わなかったにもかかわらず、ビデオに日本語版があり驚いた。

3. 博物館の在り方と展示手法

現在計画中の(仮称)琵琶湖博物館は、規模的にはイスラエルの国立博物館に相当する。琵琶湖博物館では、6,000㎡もの展示面積を持つが、いかに来館者を飽きさせないで見学してもらい、展示のみならず博物館の諸活動に参加し、ひいてはリピーターとなってもらえるかが課題の一つである。そうした意味で、ウィングに分かれ、各館が相当な特色を出すように努めているさまは一つのヒントになる。広い敷地が必要条件になるが、一つの建物の中でもコーナーごとに独立感を

出し、特徴を押し出すことは可能であろう。一方ではまとまりも必要だが、本県の場合はテーマが一つである。従って、自然史、歴史と民俗、環境、水族など展示手法を統一することを固執することは、無意味かと考えられる。

日本では実物資料がない場合、得られない場合などいきおいレプリカかジオラマによる復元、グラフィックパネルに走りがちである。そうしたものに頼らずとも、心打つ展示が可能であることを教えてくれたし、グラフィック一つにしても、その前に何か一例えば、強制収容所内の大型写真の前に有刺鉄線があるようにするだけで、その効果は倍増する。

展示室内のゆとりのスペースもあればあるほど楽な気持ちでいられることもあり、基準に則っておれば良いという身障者対策や、車椅子だけが身障者であると言う認識も改める必要がある。一つでも良いし、何らかの形でも良い。特別な心配りを考えていきたい。

例え一つでも正面に押し出す、たとえば入り口を入ってすぐのホール内に階段があるとすると、その真ん中を身障者のための施設・設備を貼り付けるぐらいの意気込みを示す博物館が現れても良いのではないか。

もう一つ。日本では博物館活動の情報量が余りに少ない。各博物館単位で広報なり広告・ポスター配付などを行っているため、一般の人が博物館巡りを行う際のまとまった情報がない。今後、少なくとも県内の博物館関係施設のネットワーク化とイスラエル観光省並とは行かないまでも、県・市町村ぐるみの取り組みが、週休二日制等の施行に伴う余暇の有効利用と相まって必要になってくる。そのための対応等も企画段階の今、練っておく必要があるだろう。(用田 政晴)

註

ハアレツ・イスラエル博物館とイグアル・アロン博物館は、テルアビブ大学考古学研究所牧野久実氏にお忙しい中、ご案内いただいた。深謝。